

位置と環境

標高65mの小高い丘陵が遺跡で、阿多カルデラの北端、断層海岸の先端部に立地し、そこからは鹿児島湾を介して大隅半島も眺望できる。この一帯は日当たりがよいことから早くから好条件の畑地帯として利用され、また、多くの遺跡も点在している。

調査の経緯

国営畑地総合土地改良事業に伴って、鹿児島県教育委員会が昭和51年7月(1986)から確認調査を行い、引き続き現地保存の困難な一部について52年2月(1977)の間本調査を実施した。

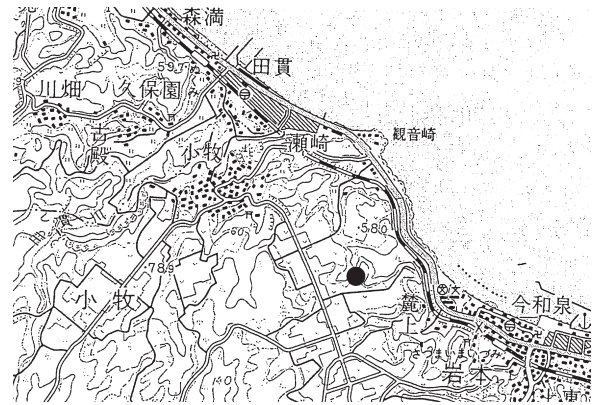
遺構と遺物

本調査では、旧石器時代ナイフ形石器文化期・細石刃文化期・縄文時代早期の遺物や遺構が発見された。特に、旧石器時代の遺跡の発見は薩摩半島南部では初めてのことであり、以来、調査研究の指標となっている。

旧石器時代の出土遺物は、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期に分けられ、大きく2石器文化期があったと考えられる。先行するナイフ形石器文化期の遺物は、ナイフ形石器98点・台形石器112点、剥片尖頭器22点・両面加工尖頭器5点・三稜尖頭器20点・スクレイパー18点・50点を越す石核のほか、折断剥片・剥片・ブランディングチップ・楔形石器・磨製石斧1点・それに大量の碎片などがある。細石刃文化期の遺物は少量であるが、細石刃・細石核・楔形石器などが出土している。

特徴

ナイフ形石器文化期の特徴として、石器の数が多くことが上げられる。遺跡内に完成した石器がこのように大量に残されることはめずらしく、当時生活の拠点として長期間遺跡が利用された可能性を色濃く示している。また、遺跡内で大量の石器製作を行っていたことも分かっている。50点を越す石核は主に、台形石器や小型のナイフ形石器を作る材料となる素材剥片を取り出すために利用されている。大量に出土した碎片は、素材剥片に最終加工を行った時



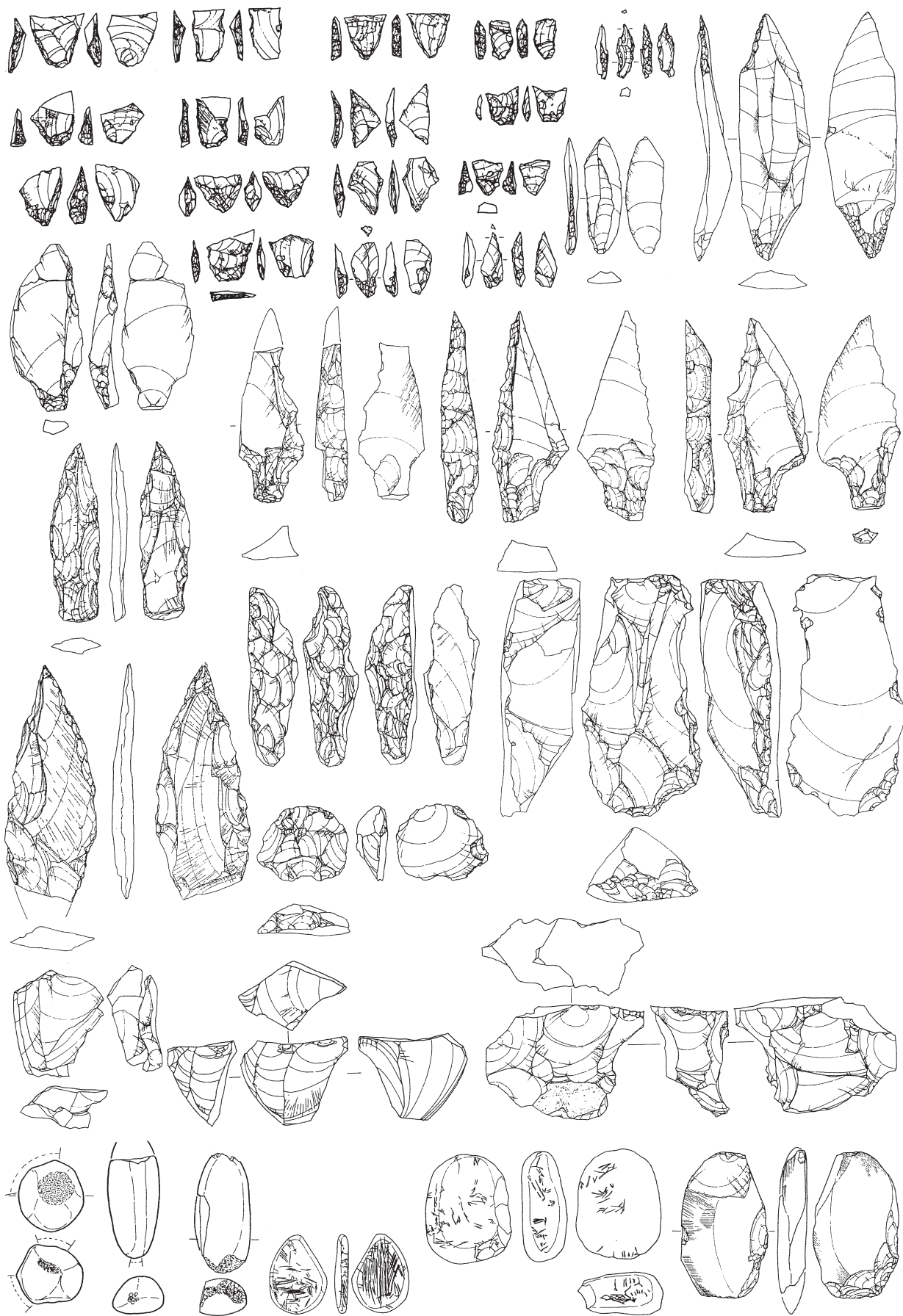
第1図 小牧 3 A 遺跡の位置

の残骸である。また、台形石器を作る目的で、素材剥片を複数に分割した折断剥片も多数発見され、一定の技術に基づいて大量の石器が作られたことを示している。一方、大型の素材剥片用の石核は発見されていないが、尖頭器を作る際の碎片や尖頭器と接合するブランディングチップが発見されている。このことから、剥片尖頭器の製作については、遺跡以外から直接素材剥片を持ち込み、遺跡では製品に仕上げるための最終加工を行っていたものと解釈される。また、小型の石器に用いた石材は遺跡からさほど遠くないところから運ばれているが、大型の石器に用いた石材は遺跡近くに産出しない流紋岩や砂岩、珪岩・頁岩であり、いずれにしても遠隔地から運び込まれている。

小型の台形石器やナイフ形石器と大型の剥片尖頭器の製作技術は大きく異なることから、2の技術の間に時間差があると捉えるか、または、同一時間の中で、技術の異なった集団が遺跡内で交流した姿を示していると判断すべきか重要な課題が残されている。また、5点出土した両面加工尖頭器は本遺跡で初めて発見された新種の石器で、近年各遺跡で増加しつつあり、小牧型尖頭器と呼ばれている。

細石刃文化期の石器は数が少なく、石器の種類や石器の形態から細石刃文化期の終わり頃、短時間遺跡に展開したと考えられる。

縄文時代の遺物は、早期の吉田式土器を中心に前平式土器・塞ノ神式土器などが出土している。中でも、前平式土器と吉田式土器の両方の特徴を備えた土器が多数あることから、土器の変遷を考える上で



第2図 旧石器時代出土遺物

貴重な材料とされている。

資料の所在

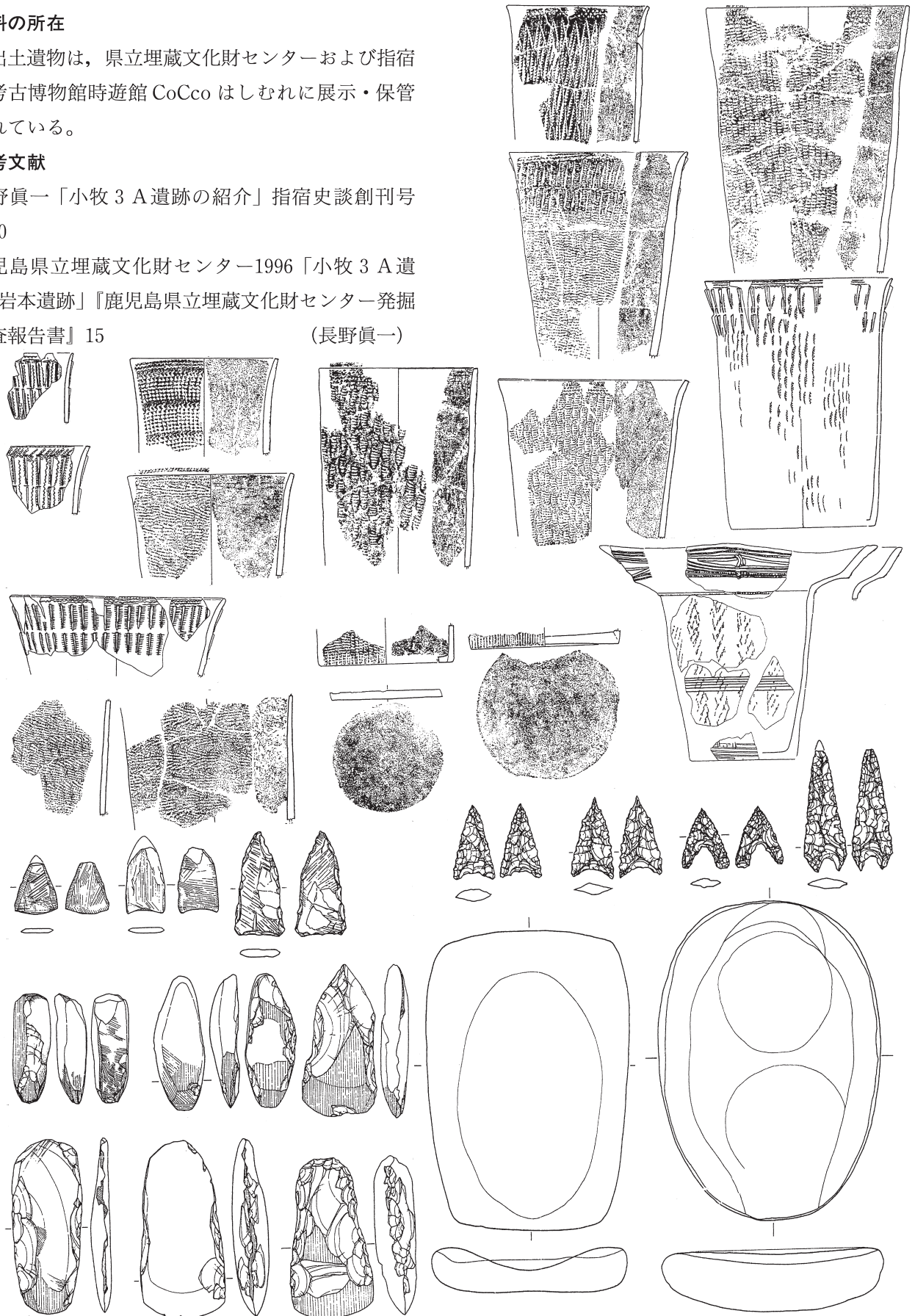
出土遺物は、県立埋蔵文化財センターおよび指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに展示・保管されている。

参考文献

長野眞一「小牧3A遺跡の紹介」指宿史談創刊号1980

鹿児島県立埋蔵文化財センター1996「小牧3A遺跡・岩本遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』15

(長野眞一)



第3図 縄文時代早期出土遺物

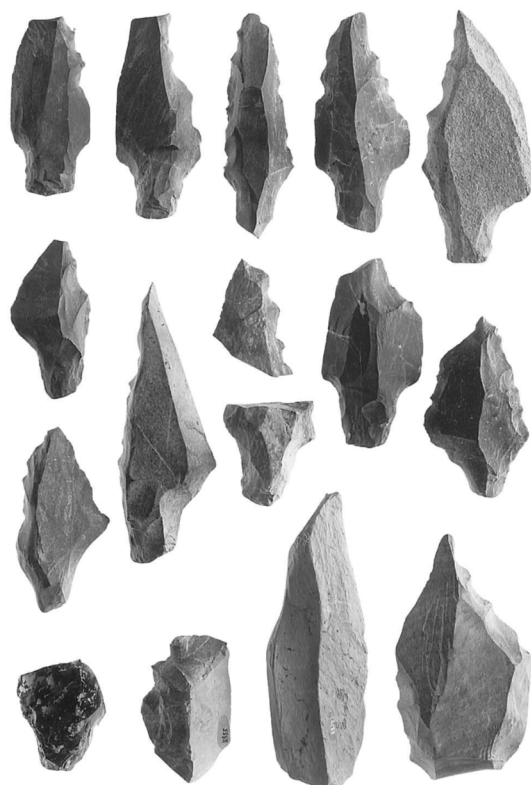
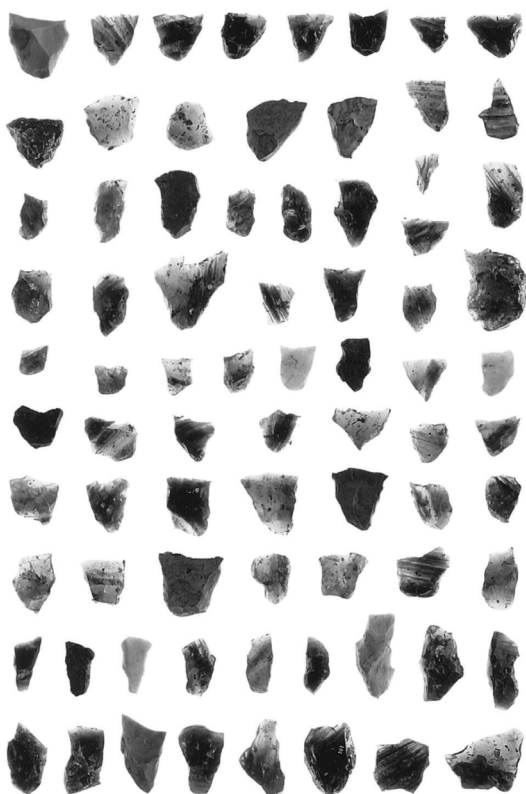


写真1 出土遺物